

| | |
|-------|--|
| 研究代表者 | 所属学系 人間・心理 氏名 飛田 操 |
| 研究課題 | コミュニケーション能力の向上に関する心理学的研究 |
| 成果の概要 | <p>本プロジェクト研究推進経費によって、以下の4つの側面からコミュニケーション能力の向上に関する検討がなされた。</p> <p>(1)インターネットを介したコミュニケーションの検討</p> <p>大学生を含む青年期の者にとって、電子メールやSocial Networking Service (SNS)等を介した非対面型のコミュニケーションは、対面型のコミュニケーションと同程度に、また時としてそれ以上に重要な意思伝達メディアになっているといえる。</p> <p>この非対面型コミュニケーションの特徴を析出するために、まず自己呈示(自分自身の情報をどの程度対話相手に向けて示そうとしているのか)の観点から検討を行った。大学生を対象に質問紙実験法によって検討したところ、自分に自信のある者の方が、そうでない者と比べて、対面場面における自己呈示量が多かった。他方、あまり自信のない者は自己呈示量が相対的に低いと同時に、対面・非対面場面での差異がなくなる傾向があった。このことから自分に自信のない者は、電子メール等の非対面型コミュニケーション・ツール一辺倒になるというわけではないにしろ、自信のある者と比べると非対面型メディアを介して自己呈示をしている、もしくは対面型と非対面型コミュニケーションを組み合わせているという可能性が窺われた。</p> <p>また、非対面型コミュニケーション・ツールのうち、とくにオンラインゲーム環境に着目し、オンラインゲーム・プレイヤーのコミュニケーション特性について検討を加えた。とくに「見知らぬ人」との交流の程度に注目し、質問紙調査及びWebによるオンライン調査を通じて検討を行った。日常対面場面において見知らぬ人とのコミュニケーションに躊躇する者は、オンラインゲーム場面においても同様に躊躇感を感じている可能性が窺われ、オンラインゲームという非対面型コミュニケーションだからといって、日常場面と非常に異なったコミュニケーションが取り交わされているわけではないことも示唆された。</p> <p>自分に自信があるかどうか、といった自己評価の程度等の個人差変数が対面型・非対面型コミュニケーションの利用頻度に影響を及ぼす可能性はあるものの、(オンラインゲーム場面での研究からも示唆されるように)非日常的なコミュニケーション場面だからといって非常に特異なコミュニケーションが取り交わされているわけではなく(一部の例外はあるかもしれないが)、概ね日常的なコミュニケーションの延長として非対面型コミュニケーションが取り交わされていると現状ではいえそうである。</p> <p>以上の研究成果は平成22年度中に2つの国内学会で発表した。</p> <p>(2)精神障害者・発達障害児におけるコミュニケーション能力についての検討</p> <p>精神障害者のコミュニケーション能力について、機能的転帰の指標として研究を進めた発達障害児の言語運用能力とコミュニケーション能力については、健常児を対象に参考データの収集を行った。両研究ともに、関連学会において、シンポジウム講演、ポスター発表、研修会の開催等を行った。</p> <p>上記研究活動の具体的内容は、以下にまとめられる：</p> <p>①統合失調症患者における機能的転帰評価尺度(対人コミュニケーションを中核とする)の日本語版作成を行った。またその標準化研究に着手した。</p> <p>②発達障害児との比較として、健常児を対象に全称量化表現理解の実験を行った。そして語彙発達以外に、論理能力の発達などが特定の言語運用能力に関わることを明らかに</p> |

| | |
|-------|---|
| 成果の概要 | <p>にした。</p> <p>(3)青年期の(友人間および家族間)コミュニケーションと自己形成・進路発達との関係についての検討</p> <p>若者のキャリア形成過程における心理社会的発達について、具体的生活行動との関連から検討することを目的とし、大学生(1,206人)・社会人(434人)のデータを収集した。エリクソンの心理社会的発達に沿った質問紙(同一性・親密性・キャリア統合)と日常生活における個人の生活時間や対人ネットワークに関する質問紙による調査を実施した。</p> <p>その結果、大学生では、対人ネットワークの広がりは大生活への積極性と関連し、職業選択自己効力感との結びつきが明らかとなった。大学生に対しては、進路選択などについて直接支援するよりも、日常生活の各場面での積極性を高める支援が有効ではないかと考えられる。社会人については、20代から30代にかけての役割変化のストレスの中で対人ネットワークは縮小し固定化する傾向が見られた。しかし、職場適応の面では専門的アイデンティティの確立やキャリア統合が進んでいることが確認された。また、大学生・社会人のどちらでもレジリエンスの高さが生活へのポジティブな行動と結びついていることも示唆された。</p> <p>(4)コミュニケーションから見た小集団問題解決過程の検討</p> <p>小集団成員のあいだの類似性、異質性をキーワードに、成員相互のコミュニケーションと集団によるパフォーマンスやコラボレーションの関連について検討し、効果的なパフォーマンスのためのコミュニケーションのあり方について実験と調査により考察した。これらの研究成果は3件の学会発表、および、1冊の著書(執筆分担)として公刊された。</p> |
|-------|---|